

# ( GREEN PEOPLE )

緑化と言っても、その範囲は造園から室内緑化まで幅広い。  
それぞれに得意分野が際立つ  
注目のグリーンデザイナーを紹介する。

左／「大手町ファーストスクエアサンクンガーデン」では、在来種のイロハモミジ、ススキ、カタクリなどを植栽し、大きく生長している  
右／東京電力の火力発電所内にある「東京ストロベリーパーク」。伊豆大島の溶岩石にイチゴ、オニヤブソテツ、オシダなどを植栽 (2点撮影/木村雄司)

PEOPLE

## parkERs

空間と植物のプロが  
協働する緑化集団

#1



空間デザイナーと植物の専門家であるブランツコーディネーターが共にプロジェクトに参画し、公園の心地良さを室内に取り込むデザインを手掛ける「parkERs (パーカーズ)」。双方の視点からの密なコミュニケーションを積み重ね、人にも植物にも心地良く、自然のリズムが感じられる空間をつくり上げる。

Q グリーンの仕事  
始めたきっかけは？

城本 元々空間デザイナーとしてアパレルショップのデザインをしており、その後、パーク・コーポレーションに入社し、「青山フラワーマーケット」の設計に携わってきました。当社のオフィスやショップのカフェを緑化すると反響があり、人と植物の関係を新たな視点で形にしたいと思い、2013年に同社の空間デザイン部門として、パーカーズを立ち上げました。児玉と出会ったのも大きい。これまで植物を使っていない場所に取り入れるので、植物に詳しい専門家が必要でした。

児玉 自然豊かな環境で育ち、自然の中で仕事をしたいと大学は農学部に進学しました。その後、生産、造園、切り花など、植物にまつわるさまざまな職場を経験。次第に細分化された業界の縦割り構造の中で仕事をするの

城本 栄治 (右)

Eiji Shiro moto

クリエイティブディレクター。アパレルの空間デザインを手掛けた後、パーク・コーポレーションでフラワーショップの設計に携わる。グリーンとインテリアが融合するparkERsを立ち上げる。

児玉 絵実 (左)

Emi Kodama

ブランツ・コーディネーター。農学部を卒業後、生花や造園、生産などの現場で働く。現在は豊富な植物の知識を生かし、グリーンデザインの企画から施工まで手掛ける。園芸療法士。

ではなく、グリーンも花も幅広く扱いたいと思うようになりました。今は植物の知識を使い、新しいことに挑戦できるのが魅力です。

Q 「パーカーズ」の特長や  
得意分野は？

城本 通常、商業空間のグリーンというのは、設計者がグリーンデザイナーに依頼し、インテリアの一要素として装飾的に植え込むものだと思います。でも、うちはプロジェクトの始めから設計と植物の両方の視点で議論を重ねます。だから、設計者も植物の特性を理解し、適した環境をつくろうとする。

児玉 植物を植えて、気持ち良くなるのが人間だけだと、長続きしません。持続可能な緑化のため、環境に合う植物の選定、産地からの調達、室内緑化に最適な照明計画、オリジナル培養土の開発まで手掛けています。

城本 単なる観賞用の植物を配置するだけでなく、「公園の心地良い要素」を因数分解して、デザインに変換することで、人の本質的な感覚を刺激する空間を目指しています。木漏れ日のような照明や水の流れや音を取り入れたり、石や木などの自然素材を使用したりするのも、そのためです。

児玉 室内では感じにくい、天候や季節の変

化といった自然現象を室内に取り込むことも特徴の一つです。例えば、「hamon lamp」は床に水紋を落とす照明ですが、気象データと連動させることで、雨が降ると水滴の落ちる回数も増え、天気を表現することもできます。

Q 「大手町ファーストスクエア  
サンクンガーデン」について  
教えてください。

城本 オフィスビルの公開空気を緑化し、リニューアルしました。もともと階段状の広場だったところを、人が滞在できる場所になるよう、ガーデンと一体となったテラスに改修。周辺の皇居や「大手町の森」の緑とつながるよう、「溪谷」をイメージして、水と植物と人の居場所をデザインしました。なるべく植物と人を絡ませたいと考え、グリーンを囲むレイアウトに。中央には飛石で小道を通し、足元のグリーンに視線を誘導しています。  
児玉 植栽は、千代田区の在来種を中心に、シダやツワブキなど、湿地や日陰を好む植物を植えています。既存の水盤に水を張り、水場に人も植物も集まるシーンをイメージしました。始業前、ランチタイム、仕事帰りなど、1日を通して、人が集まるスポットとなり、いつもにぎわっています。

自然の持つリズムを伝える  
心地良い空間をつくりたい。

Q 「東京ストロベリーパーク」の  
デザインについて教えてください。

児玉 横浜市にある一年中いちご狩りを楽しめるテーマパークです。そのファームにつながる待合の空間づくりを依頼され、家族連れが待つ間に眺めたくなる、動きのあるものが良いと考え、未来の農業と言われている「アクアポニクス」を提案しました。微生物の力を使い、水を浄化しながら、魚と植物を共に育てる循環型システムです。川魚やエビも飼育しているのですが、自然の色や生き物の動きは飽きずに眺めていられる。新しい水の表現方法としても可能性を感じています。

Q グリーンを通して  
伝えたいことは？

城本 目に見えるものだけではなく、自然の持つリズムを空間を通して伝えるのが、僕らのアイデンティティ。植物はもちろん、光や香りや水音、木や土の感触なども重要な要素だと感じ、デザインに取り入れています。今はあまりにも便利な時代になってしまったので、「不便であること」が逆に刺激になる。自然に触れることが気付きを生み、感覚を豊かにしてくれるのだと思います。